

2021

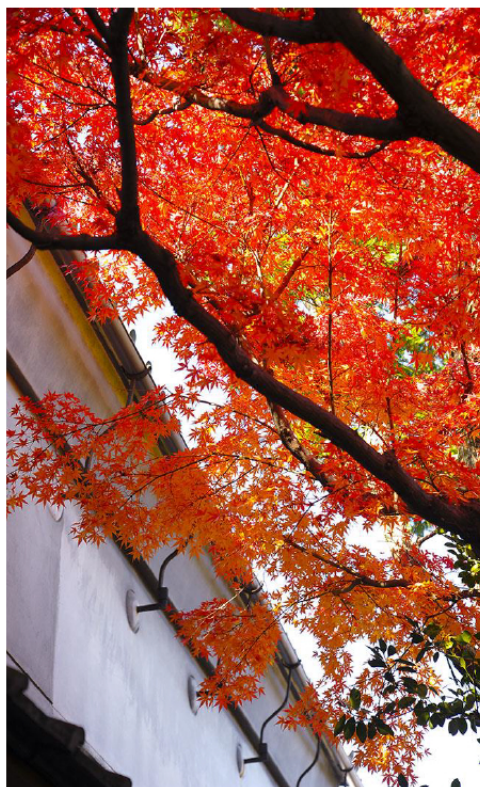
秋号

まつさか歴史文化かわら版

第11号



旧長谷川治郎兵衛家庭園



松阪市役所の隣にこんなに素敵なお庭があるなんて！

これは、市外から旧長谷川治郎兵衛家を訪問された観光客の方のみならず、松阪市にずっと住んでおられる市民の方からも聞かれる感想です。

今年は新型コロナウイルス対策としてやむを得ず休館させていただいた日もありましたが、この美しい紅葉の季節には、ぜひ多くの皆さんに安心して松阪市の歴史文化施設に来訪していただきたいと存じます。

なんとかこの禍が治まりますよう心から願うものです。

今回の展示はここがみどころ！

旧長谷川治郎兵衛家 長谷川家と玄々斎

令和3年9月15日(水)～12月19日(日)



りきゆうこじ

【利休居士像】江戸時代後期

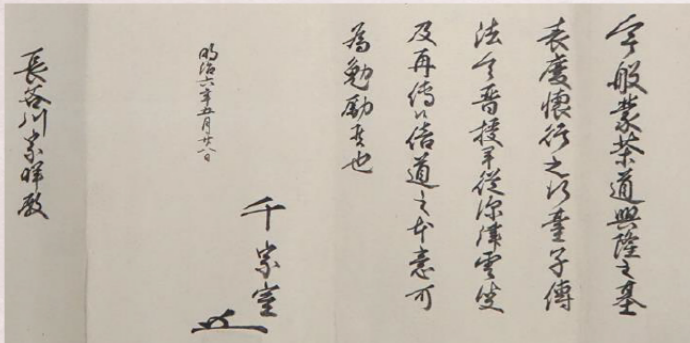
この像は、玄々斎が長谷川家8代当主元貞へ贈ったと思われるもので、利休の命日「利休忌」に長谷川家で祀られていた。

長谷川治郎兵衛家の歴代当主は、代々裏千家の家元に茶の湯を師事し、裏千家の高弟というだけでなく、家元との親交を深めた強力な後援者でもありました。松阪においては、茶の湯などを通じて他分野の文人たちと交流し、地域の文化を育む役割も担いました。

長谷川家6代邦淑は、松阪における裏千家茶の湯普及の先達者 藤田適斎の娘婿にあたり、裏千家8代又玄斎・9代不見斎・10代認得斎に師事しました。適斎が死去した後は、邦淑が松阪社中の中心となります。

邦淑の長男 7代元美は、文政10(1827)年に裏千家11代玄々斎(1810～77)に許され、茶室「今日庵」を屋敷の表庭に建てました(大正2年に日本庭園の一隅に移築、昭和63年に解体)。続く8代元貞・9代元熙・10代元章も玄々斎に茶の湯を学びました。

本展では裏千家家元のなかでも、長谷川家8代から10代の当主が師事した、近代茶道の先駆者といわれる玄々斎を取り上げます。玄々斎が長谷川家に宛てた書状や、玄々斎が意匠などを職人に指示して作らせた「好み」の茶道具などを通して、長谷川家と玄々斎の関係をご紹介します。



【免状】明治6(1873)年

裏千家11代玄々斎より長谷川家9代当主元熙への行の行台子を学ぶことを許された免状。



もとひろ

お知らせ

● 松阪学入門講座・歴史街道発見講座受講予定の皆様へ

本年9月から開講を予定しておりました「松阪学入門講座」、「歴史街道発見講座」は、緊急事態宣言の発令を受け、日程を変更して10月から開講します。お申し込みいただいた皆様には、すでにこの旨を通知しておりますが、コロナ禍の状況により、再延期もしくは中止せざるを得ない場合もありますのでご了承ください。

● 秋季イベント開催について

紅葉の季節のイベントとして、本年度は氏郷市民茶会やミニコンサートなどの開催を予定していますが、コロナ禍の終息状況により、中止せざるを得ない場合もあります。

旧小津清左衛門家 小津家の信仰と年中行事

令和3年9月29日(水)～令和4年1月9日(日)

江戸店持ちの松阪商人の当主は、松阪の本宅に居住しながら人事を掌り、遠く離れた出店の経営一切は支配人に任せていました。

このように経営と距離を置いた当主は、「家業の永続」のため、日頃から功德を積んで祖先や神仏を敬い、家内安全・商売繁盛を熱心に祈願しました。小津清左衛門家の当主は、毎日のように菩提寺の養泉寺(松阪市中町)や近在の寺社に参詣し、市内はもとより県内外の寺社に多くの寄進を行いました。

また、毎年恒例の年中行事として、正月・お盆・彼岸はもちろんのこと、恵比寿講・鎮守社(金比羅)祭典・山の神祭・年忌法要・講参宮などが執り行われていたことが、小津家11代当主長柱の日記や家乗記録などから読み取ることができます。

本展では、小津家の神仏に対する信仰がうかがえる資料や道具類などを通して、小津家の信仰と年中行事をご紹介します。



じゅうろくぜんしんず

【十六善神図】天保10(1839)年

りゅうしんじ
津の龍津寺より小津家11代当主長柱へ贈られたもの。

原田二郎旧宅 松坂城代与力 服部中庸の学問

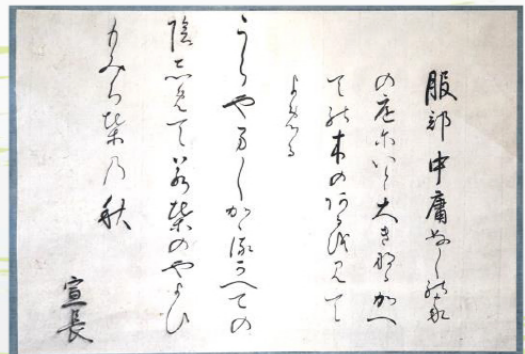
令和3年12月15日(水)～令和4年4月17日(日)

江戸時代を代表する松阪出身の国学者 本居宣長(1730～1801)は、全国に500人余りの門人を擁し、松坂城下には76名の門人がいました。

その中であって、紀州藩士の服部中庸(1757～1824)は、宣長の古学を継承した数少ない高弟の一人です。中庸は松坂城内の鷹部屋跡(市民病院裏)の城代組同心屋敷に生まれ、号を楓蔭などと称し、29歳で宣長に入門しました。その代表作である『三大考』は、天(太陽)・地(地球)・泉(月)からなる宇宙の成り立ちと、これに対応する神々を「記紀神話」に基づいて論述したのですが、これを賞賛した宣長は『古事記伝』巻17の付巻として刊行しました。

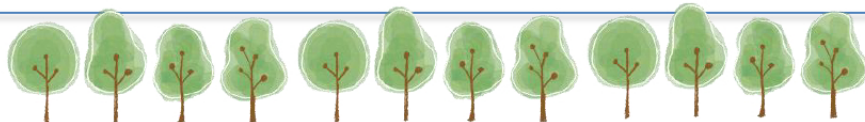
宣長没後、この『三大考』をめぐる、宣長学統と国学者 平田篤胤(1776～1843)との間で論争が起こっています。やがて中庸は、城代与力の職を辞して京都に上り、町医を営むかたわら宣長の古学を広め、最晩年には篤胤との交友を深めました。

本展では、『三大考』の稿本類や詠草、宣長が中庸へ贈った懐紙などを通して、「国学者 服部中庸」をご紹介します。



【宣長懐紙】江戸時代後期

宣長が中庸へ贈った懐紙。歌とともに楓蔭の号を贈った。



● 土居光華と渋沢栄一

土居光華(1847～1918)は、淡路国三原郡土井村(兵庫県南あわじ市)に生まれ、号を淡山と称し、自由民権の政治家、漢学者、文筆家、翻訳家としても知られています。明治20(1887)年には、飯高・飯野・多気郡長に就任し、辞職後は、三重県第4区から衆議



土居光華

院議員総選挙に立候補して当選を果たしました。晩年は殿町に住み、本居宣長の山室山奥墓の保存活動を展開するなど、松阪の発展に尽力した人物でもあります。

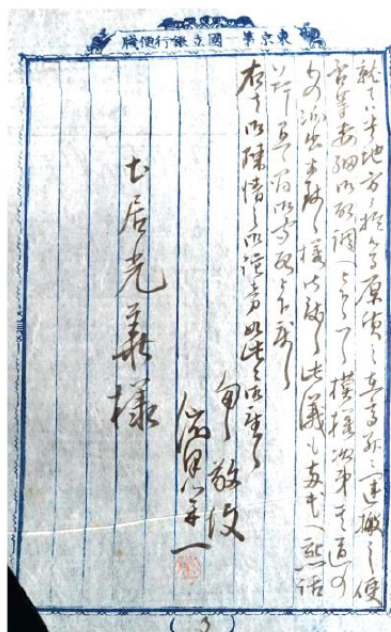
また光華は交友関係が広く、松阪市に寄託された膨大な光華宛ての書簡群には、伊藤博文や板垣退助、大隈重信、高橋是清といった明治から昭和初期にかけての政財界の要人たちの名前が見受けられます。今回は、そのなかでも、「日本資本主義の父」と呼ばれ、明治から昭和にかけて活躍した実業家であり、現在、新一万円札の肖像として起用されたことや放送中の大河ドラマ「青天を衝け」の主人公として話題の渋沢栄一(1840～1931)が光華に宛てた3通の書簡をご紹介します。

明治21年の書簡には、静岡で製紙工場が建設されたこともあり、松阪地域においても原材料となる^{もみ}樅の量や運

搬の利便性など詳しく調査すれば専門家を派遣するといった内容が記されており、渋沢は松阪地域へ製紙工場建設の可能性を示唆しています。江戸時代初期から始まった飯南町深野の特産品「深野紙」の受注量が、この頃から激減し始めたため、光華は紙漉業の再興を願って渋沢に工場誘致を要請したとも考えられます。

また、大正5(1916)年の書簡には、渋沢が委員長を務めていた故桂公爵記念事業会に対して光華が金5円を寄付したことへのお礼、大正7年の書簡には、渋沢が名古屋・三重を訪問した際に受けたおもてなしへの謝意や

無事帰京できたことが記され、両者の親交は光華の晩年まで続いていたことがうかがえます。(扇野)



明治21年10月4日付
土居光華宛渋沢栄一書簡



歴史文化3施設のご案内

【開館時間】9:00～17:00

(16:30までにご入館ください)

【休館】月曜日(祝日の場合は翌日)

／年末・年始

【連絡先】

◆旧長谷川治郎兵衛家

Phone: 0598-21-8600

◆旧小津清左衛門家

Phone: 0598-21-4331

◆原田二郎旧宅

Phone: 0598-23-1656

発行 NPO法人松阪歴史文化舎

〒515-0082 松阪市魚町1653

Phone: 0598-21-8600

E-mail info@rekishibunkasha.onmicrosoft.com

